



雨の日、無口で根暗な
いじめられっ娘を拾いまして

著:相山タツヤ

雨の日、無口で根暗ないじめられっ娘を拾いまして

高校での俺は、いわゆる『ボッチ』という奴だ。

こう言うと、クラスでイジメでも受けているのかと誤解されるかもしれない。しかし実際には、クラスメイトが何か危害を加えてくるといふ事はないし、話しかければ普通に受け答えもしてくれる。

ただ俺は、人の輪に入るのが苦手なのだ。

流行の話に付いて行くことが出来ず、どうやって会話に入り込んで盛り上げていったらいいかわからない。

皆が当然のようにやっている事が、俺には出来なかった。

だからイジメを受けても居ないのに、友達らしい存在も出来ず、ただひたすら孤立している。

昼休みが来るたびに、消え去りたい気分になる。

他のクラスメイトたちは仲のいいグループで集まって談笑を始める一方で、俺はただ一人黙々と昼食を食べる。

会話というものが無いので、いつも十分と経たずに食べ終えてしまう。その後は、ひたすら寝たふりをして過ごすだけだ。

ネットでは『便所飯』などという行為がボッチの象徴としてよく挙がるが、あんなものは一握りの開き直った勇者しか出来ない事だ。

俺のような本物のボッチは、昼休みに毎回トイレに消えて出てこないなんて目立つ奇行を表立ってやる勇気などない。

早々に昼食を食べ切って、あとは自分だけの精神世界に閉じこもって何も見ないふりをする。これが真のボッチの処世術だ。

こんな生活は寂しくて嫌だとは思っている。
だが、それ以上に、人と関わる事が怖いのだ。

他人と取り留めのない会話をするだけでも、相手に嫌に思われていないかといちいち心配してしまう。

そして、表立って何も言っておかないだけで、陰では皆で俺の悪口を言い合っているのかもしれないと、被害妄想がエスカレートしていく。
だから、無理して他人に関わろうとして嫌われていくよりも、植物のように人々にとって無関心になる方が楽だと思ってしまうのだ。

彼女が欲しいという欲求はあっても、同じ理由で、下手な行動は絶対にしない。

こんな植物のように生きることを望む野郎を好く女子など、絶対に居ないと分かり切っている。

「……雨かよ」

下校時間、校門を一人出た俺は、落ち着き払った動作で鞆から折り畳み傘を取り出した。俺の横では、男子グループが笑いながら雨の中をダッシュしていく様子や、女子たちが相合傘で騒ぎながら帰っていく光景が見て取れる。

折り畳み傘を常備している俺には隙など無いのだが、何だか逆に負けたような気分になせられてしまう。

俺はいつもの通りイヤホンを耳に突っ込んで、お気に入りの曲をループでかけ流しながら、帰路についていく。

今日はいいにくの雨。しかし何も変わらぬ、孤独な帰り道。今の俺は、ただの通行人Aだ。住宅街に入り、間もなく家が見えてくる頃。

そこで俺は、いつもと少し違う場面に遭遇した。

「クソッ、調子こいてんじゃねーよ。早く死ねよ、ボケ」

同じ学校の制服を着た女子の三人組が、ゴミ捨て場に集まって悪態をついている。

まさか、近隣住民のゴミ出しマナーの悪さを憂いているわけではなからう。

咄嗟に俺は近くの曲がり角に隠れ、様子を伺った。

「なんだよ、その目？ 文句あんのかよ、ゴラァ！」

「ほんと、いつ自殺してくれんの？ あんたの顔を見る度、イライラすんだわ。マジ迷惑料よこせよ」

「きったねー、ゴミまみれ。そのまま住めばー？」

よく観察すると、三人組の他にもう一人いた。

その人物は、ゴミ袋の山に埋もれて倒れている。

「これに懲りたら、二度と学校来んなよ。来たら、またシメてやるから。さっさと自殺しろよ、バーカ」

おぞましい台詞を吐いて、女子たちはその場を去って行った。
彼女たちが去った後、俺は恐る恐るそのゴミ捨て場に近づいていく。

「あの……大丈夫？」

一瞬、女子生徒の死体が捨てられているのかと思った。

しかし俺の言葉に反応して、彼女は静かに目を開いていく。

身丈に合わないフード付きの黒いレインコートをすっぽり羽織った、陰気な目をした女子。

その肌は蒼白く、いかにも病的な雰囲気漂っている。

何故か、季節外れのマフラーを巻いて、口元を隠している。

彼女は雨に打たれながら、俺をキッと睨んだ。

「誰……?」

「ごめん、ただの通りすがりだ。今の奴らに、やられたのか?」

彼女の鞆の中身は、ゴミ捨て場にぶちまけられている。

明らかに、これはイジメというやつだ。

「ボクに、構わないで。ボクは……ここで、死ぬから」

彼女はそんな事を言って、ゴミ袋の山の中で大の字に倒れていく。

「駄目だって……! ほら、汚いから早く起きた方が良いよ。虫だっているかもしれないし……」

俺は彼女の腕を掴んで、強制的に身体を引き起こす。

もっと抵抗されるかと思っていたが、彼女の力は驚くほど頼りなかった。

彼女は、ぼんやりとその場に座り込んで、雨に濡れ続ける。

「大丈夫か？ ほら、この傘を持って。荷物、拾ってやるから……」

俺は持っていた折り畳み傘を無理やり彼女に握らせて、散らばっている彼女の荷物を拾い集めていく。

「……どうして、ボクに、構うの。なんのいい事もないのに」

「こんな酷い目に遭ってる人を見て、放っておけるわけないだろ……」

ふと拾い上げたノートに、赤ペンでびっしりと『死ぬ』と書かれているのを見て、俺は吐き気を覚えた。

同じ人間の所業とはとても思えない。

「許せない。あいつら、どこのクラスの奴だ？　俺が学校に報告してやる」

「余計な事しないで……ボクが消えれば、済む話だから……」

「ふざけんな。あんなクズ野郎の方が消えた方が良いに決まってる。君は悪くない」

俺は激しい怒りに駆られながら、ずぶ濡れになることも厭わず、彼女の荷物を拾って行く。

教科書やノートは雨に濡れてしわくちゃで、もう使い物にならない。既に、呪詛の落書きによって汚されていたが。

そう言えば、同じ学年でずっと不登校になっている女子生徒が一人いると聞いたことがある。

クラスが異なるので名前も顔も知らず、今まで興味を抱いたこともなかったが、まさか彼女がそうなのか。

「ほら、荷物は集めたけど……ごめん、濡れて汚いかも。もっと早く拾い始めればよかった」

俺は彼女の鞆を差し出した。

よく見ると鞆にも、土足で蹴った跡や、カッターで破いた傷がある。

「わからない……どうして、そんなにボクに構うの？」

「だから、理屈なんて無い。ただ、ほっとけなかったんだ。当然だろ」

彼女は、瞬きもせず、陰気な瞳で俺を見据え続けた。

警戒、戸惑い、安堵、様々な感情が巡っているように見える。

さて、ここから俺はどんなアクションを取るのが最適なのだろうか。ポッチのコミュニケーション、この先どうすれば良いか分からない。

少なくとも、これほど傷付けられた同級生を放っておいたまま、じゃあねと帰るわけにはいかない事は分かるのだが。

「えーっと……服と荷物を乾かした方が良いのかな。俺の家が近いから、来る？」

そう言ってみた所で、俺は自分のミスに気が付いた。

相手が女子であるという意識が全く抜けていた。親交の全く無い男子が女子をいきなり家に誘うなど、あまりにデリカシーがない。

やってしまったとアワアワしていた所で、あろうことか、彼女はコクリと頷いた。

「ほ、本当に良いの……？」

俺の心配をよそに、彼女は再びコクリと頷いた。

もうこれ以上喋って自ら墓穴を掘るのは嫌なので、俺は大人しく彼女を家に案内することにした。

大きくない折り畳み傘を二人一緒に使うので、どうしても距離が近くなり、肩も触れ合っ

てしまう。

俺はドキドキして仕方がなかったが、彼女はずっと陰気な無表情で俺に付き従っている。

「えーと……名前は、何て言うんだ？」

「……ツバキ」

苗字か名前か判然としないが、俺はうんうんと頷いた。

「ツバキさん、あの……傘、狭くない？俺、別に濡れたって良いけど」

「べつに、狭くない。ボク、コート着てるし……。キミこそ、ゴミ臭くて嫌じゃない？」

「臭くなんかないよ、むしろ良い匂いだと……いや、違う！変な意味じゃないよ！」

「ゴミの臭いが好きなんだ？ほんとに変な人だね、キミは……。あと、『さん』付けしな

くていい」

「わ、分かったよ……ツバキ」

何だか女子の下の名前を呼び捨てにしているようで、どぎまぎしてしまふ。

下心など絶対に無いはずなのに、状況が状況なので、色々と変な方向の想像がよぎっていく。

やがて、俺の住んでいるマンションに到着した。

郵便受けをチェックしてから、エレベーターに乗り込む。

まだ部屋に着いていないのに、この時点でもう俺はドキドキしていた。

初めて俺の部屋を指して女子と二人でエレベーターに乗っているのだ。

こんな体験、二度と出来るとは思えない。

「……いいとこ住んでるんだね」

「え？ いや、そんなこと無いよ……普通のマンションだ」

言い終えてから、再び俺はコミュニケーションのミスに気付いた。

多分、ツバキの発言には嫌味が含まれていた。恐らく、彼女の家庭環境も恵まれてはいない。

俺が謙遜してしまった事で、かえって彼女の境遇の差を強く知らしめてしまったのではないか。

俺は内心穏やかではなかったが、ツバキの顔には何の変化もない。

特に気にしていないのか、それとも全く表情に出ないだけか。

こうしてエレベーターは目的の階に着き、そのまま俺は自分の住む部屋に彼女を案内していく。

「キミの親も、いるの……？」

「いや、今は出張中で俺だけだ。二人で遊び放題だよ」

もう俺は喋らない方が良くかもしれない。下心を連想させる誤爆をしてどうする。

「……ボクと、遊びたいの……?」

「え?」

俺はドアの前で鍵を握ったまま硬直した。

やけに妙な意味を含んだ言い回しに聞こえて、俺は焦る。

ツバキは、口元を隠すマフラーを少しずらして、俺を見つめた。

「ボクと遊んでも……楽しくないよ……? 今のゲームなんて、なんにも分かんないし……」

どうやら一刻も早く邪念を浄化すべきなのは俺だけのようだ。

「良いよ。教えてあげるからさ。顔の见えないオンライン対戦ばかりじゃ、寂しいと思っ
てた所だし」

ドアを開けて、玄関にツバキを招き入れる。

「……おじゃまします……」

親が居ないと知っていながら、彼女は礼儀正しくそう言って靴を脱いだ。

さてこれからどうしようかと、俺は棒立ちになって考えあぐねた。

自室とリビング、まずどちらに案内すべきだろうか。クラスメイトを招くなんて初めて
なので、勝手が全く分からない。

「どうしたの……？ キミの部屋に行くんじゃないの……？」

ツバキが俺を不思議そうに見つめた。

俺は三秒間硬直した後、恐々と頷いた。

「あの、まず、ごめん。全然片付けてなくて汚いけど……」

俺は自分の部屋を紹介しながら、毎日掃除する習慣が無かったことを心底後悔した。

漫画は床に散らかり放題だし、ハムスターの如くお菓子を枕元に貯め込んだ寢床も乱れっ放しだ。

「いいよ……ボクの方がずっと汚いし。座っていい？」

そう尋ねられた俺はリビングからクッションを持ってこようとしたが、その前にツバキは俺の布団の上に座り込んだ。

まさか俺が睡眠と自慰の権利を独占していた布団に、本物の女子の尻が乗せられる日が来る事になろうとは。

俺は緊張しながら、彼女の隣に座り込んだ。

さて、俺はツバキをどうする為に家へ招き入れたのか。

自分で誘っておきながら、初めてのイベントで興奮しっぱなしで、本来の目的をド忘れしてしまう。

ツバキは何も言わず、コートを羽織ったまま布団の上で膝を抱えている。

「あ、コート、脱ぐ？ 掛けてこようか」

「ううん……ボク、寒がりだから……このままで居てもいい……？」

そう言われると俺は何も言えない。

雨で濡れっぱなしなので布団が湿ってしまいそうだが、その方が彼女の痕跡が布団に鮮明に残るのではと、つい変態的なことを考えてしまう。

彼女はそれっきり、何も喋り出さなかった。

俺が健全な会話の切り出し方について色々悩んでいる間に、沈黙がずいぶんと長くなつてしまった。

けれども、不思議と気まずさは感じなかった。

まるで二つの植物が寄り添い合っているように、静けさが何だか心地よくなってくる。

ふと俺は、虚空を見つめているツバキの顔を見た。

すると彼女もそれに気付いて、俺を見つめ返した。

じつと見つめ合ったまま、また長い静寂の時間が流れた。

恥ずかしくなってきた、俺の方が先に目を逸らしてしまった。

ツバキは顔を傾けて、俺を覗き見る。

「……やっぱり、退屈？」

「いや、そんな事ない！ 楽しいよ」

「なにが、楽しいの……？ 座ってるだけなのに……」

「何というか……こうして、自分の部屋で女子と一緒に座っているのが、何だか嬉しくて……いや、違う、変な意味じゃなくて……」

「……そんなこと言われたの、初めてだよ」

ツバキはそう言って、顔を少し俯かせる。

相変わらずの陰気な無表情であったが、心なしか嬉しそうにも見えた。

ツバキへの愛着が湧くと共に、彼女を苦しめる連中がよりいっそう許せなくなってくる。

「あの……ツバキは、どうしてイジメを受けてるんだ？」

「ボクが、邪魔だからだよ」

ツバキの音が、暗く沈んだ。

地雷を踏んだと気付いた時には既に遅く、彼女は憎悪のこもった口調で喋り始める。

「……もともとボクは身体が弱くて、授業に休みがちだった。そうしたら、だんだん登校する度にいじめられるようになった。ズル休みでサボリやがって、そのまま死んじまえて言われた。最初は我慢して頑張ってたけど、ボクが我慢するほどイジメが酷くなった。机に花が置かれるなんて当たり前。ノートにも教科書にも死ねって書かれて、ゴキブリの死骸を鞆に突っ込まれたこともあった。トイレに行ったら閉じ込められてホースで水をぶっ掛けられた。殴られたり蹴られたり、わざと突き指にされたりした。何もかも嫌になって、学校に行かなくなった」

まるで地獄の釜の蓋が開いたかのように、ツバキは目を見開いたまま一切の瞬きをせず、

まくし立てる。

その声は、徐々に鋭く大きくなっていく。

「家ではお父さんとお母さんに出来損ないって言われた。いじめられる奴の方が悪いって言われた。お姉ちゃんと比較して、お前はクズだって言われた。ボクは家に引きこもった。みんなが談笑する声が聞こえてくるけど、ボクはいつもひとり。ボクは邪魔者だから。今日はお姉ちゃんの交際相手が挨拶に来るっていうから、ボクは追い出された。だからすごく嫌だったけど学校に来た。そしたらやっぱりポコポコにされた。もう嫌だ、嫌だよ！ボクは邪魔者なんだ！消えた方が良い！死んだ方が良いんだ！ボクは……」

俺はツバキの深い苦しみを解放できる言葉など持っていなかった。だから俺は、黙って彼女の冷たい身体を抱き締めた。

「あ……」

彼女の言葉が、ようやく止まった。

俺は涙を堪えながら、彼女の震える背中を優しくさする。

「……よく、頑張ったな……ツバキ……。俺だったら、きっと死んでるよ……。本当に、よく耐えたな……。頑張ったなあ……」

俺は感情のままに語り掛けた。

そして彼女が消えてしまわないように、強く抱擁し続ける。

「もう、我慢しなくていい……。学校もぶっ飛ばして、家も蹴り飛ばして、全部、逃げちまおうぜ。逃げたって何が悪いんだ。ツバキは何も悪くない。どうしてツバキが苦しまなきやいけないんだ。こんなの……。絶対に間違ってる」

すると徐々に、力無く垂れ下がったままだったツバキの腕が上がっていき、俺の背中を強く掴む。

「……グスッ……うううっ……!」

ツバキはただ大きな嗚咽を漏らしながら、必死に俺に縋りついた。

誰にも頼れなかった彼女は、きつと泣くことすらも我慢し続けていたのだろう。鬱積した感情が決壊し泣き続ける彼女を、俺はずっと優しく受け止めていた。

こうして長い時間が経ち、日が暮れて雨も止んだ頃。

ツバキの泣き声がようやく静まって、俺は少し身を離れた。肩を抱き合いながら、間近に見つめ合う格好になる。

ツバキは泣いて赤らんだ瞳で、俺をじっと見据えていた。

そんな彼女を眺めていると、俺の中で別の想いが膨らんでいく。

するとツバキは、口元を隠していたマフラーを、自らの手でずらした。

潤った桃色の唇が俺の前に露わになった。そして温かな吐息が、そっと吹きかけられる。

ツバキは相変わらず無言だ。

だが、彼女が何を求めているのか、その瞳が、唇が、はっきりと物語っている。

俺は成り行きに任せて目を閉じて、自分の唇を近づけた。

そしてついに、ひんやりと湿った彼女の唇が、柔らかく俺に押し当たった。

人生で初めてのキス。

幼い頃は、長い月日を重ねて少しずつ親密になっていき、やがてキスというゴールに辿り着くのが男女の恋愛だと思っていた。

まさか、今日初めて名前を知った同級生と、初めての口付けを行うことになるとは。

けれども、もはやそんな順序など気にしていられない。

ツバキを守りたい。ツバキを愛してあげたい。今すぐに。

ツバキが自ら、俺の手を握ってきた。

右の手、左の手の指もしっかりと絡ませて、何度も唇を触れ合わせる。

「ツバキっ……」

俺は目を開けて、たったいま口づけをした相手の顔を見た。

ツバキの顔は相変わらずそのままだったが、頬は僅かに紅潮しており、呼吸も少し早くなっている。

「ツバキ……もっと、キスしていい……?」

彼女は返事をする代わりに、俺の手をギュッと強く握ってきた。

俺は迷うことなく、唇を再び合わせていく。

今度はキスをしながら唇を開き、舌を差し出した。

「……ん……ちゅっ……」

ツバキも自分から舌を出し、俺の舌と触れ合わせた。
温い唾液に濡れたざらざらの舌が、俺の舌を丹念に舐め上げていく。

「……ちゅっ……んむっ……ちゅ……」

握り合った二人の手が、熱く汗ばみ始める。

俺とツバキは、愛撫のように指を絡めた手をにぎにぎしながら、互いの舌を貪欲に舐め合った。

それから唇を密着させ、ツバキの口内に舌を侵入させていく。

ナメクジの交尾の如く濡れた舌をじゅるじゅると絡めながら、二人の唾液をかき混ぜていく。

まさか男女のキスが、これほど官能的な刺激のあるものとは知らなかった。

「はあっ……んっ……ちゅっ……」

握っていた手を離し、今度は二人で強く抱き合いながら、本能のままにディープキスに耽る。

俺はツバキの背中を優しく撫で、そのまま徐々に下へとずらしていった。

「……………んんっ……………！」

俺の手がツバキの腰を触った所で、彼女の身体がピクッと反応した。

「あっ、ごめん……………嫌だった……………？」

「……………イヤ、じゃない……………」

久しぶりにツバキの声を聞いた気がする。

今度は彼女の方からキスしてきた。

俺はまた彼女と舌を絡め合わせながら、彼女の腰に当てていた手をゆっくり下ろしてい

く。

コート越しに、彼女の丸いお尻の感触が分かった。

するとツバキは俺の手を取って、コートの内側へ導いた。

制服のスカートをさらりと潜り抜ける感触の後、むちっとした肌に触れた。

俺は今、ツバキの生尻を触っている。そう実感して、下腹部に強い衝動が走った。

彼女の肌はひんやりとしているが、手に吸いつくような湿った感触が、いやに生々しい。

「……あむっ……ちゅっ……」

ツバキが俺の舌を唇でぱくっと捕まえて、唾液をちゅうっと吸った。

ゾクゾクするような快感が湧き上がってきて、俺も理性が麻痺してくる。

彼女の柔らかいお尻を撫でまわし、揉みしだく。

そしてその指先を徐々に、お尻の谷間へと滑らせていく。

人差し指をショーツの中に潜り込ませると、にゅっ……と湿った肉が触れた。

「あうっ……」

ツバキが驚いて唇を離し、目を細めて俺を見据えた。

「……そこ……ボクの、お尻の穴」

「あ、ごめん！」

流石にやり過ぎたかと思っていたが、ツバキは再び俺の手を取って、今度は前の方を導いた。

「こっち……」

俺の手が、今度はショーツの前側に潜り込んでいく。

さらっとした陰毛を撫で下ろす感触の後、その茂みの奥に、柔らかい肉の感触を見つけ
た。

「はっ……んっ……」

ツバキが目を閉じて、身体を震わせた。

優しく指の腹でなぞっていくと、じつとりと湿った肉の割れ目がある事が分かる。

間違いなく、ここが彼女の陰部だ。

俺は呼吸を荒くしながら、慎重にその割れ目を指でなぞっていく。

その肉は複雑な形をしており、漫画で見るような一本筋ではなく、びらっと隆起した肉の
裂け目があるような感じだ。

ここに穴があるはずだが、不思議な事に、いくら触っても探り出せない。

「……はぁ……はぁっ……」

股間をまさぐられ続け、ツバキの呼気も艶っぽくなってきた。

彼女はショーツの中に侵入する俺の指に自分の手を添えて、より下部へと導いていく。そこでついに俺の指先が、ぷちゅつと水気のある肉に触れた。

その指に力を込めると、にゅぷぷ……という未知の感触と共に、指が彼女の体内に呑み込まれていった。

「んっ……あぁっ……！」

これが、女子の膣内。スカートに隠れて見えない分、その感触が鮮明に指に伝わってくる。

俺の指に、ねっとり濡れた温い肉ヒダが、きゅうつと隙間なく吸いついてくる。

指の腹を使って膣壁をにゅるつと撫で上げてみると、彼女がビクンツと跳ね、その動きに合わせて膣が蠕動した。

膣は、この肉ヒダと締め付けで、雄の陰茎を射精へと導いていく器官なのだ、改めて

実感する。

想像も及ばなかったその秘境の艶めかしい手触りに、俺の興奮は最高潮に達し、制服のズボンの下では股間が痛々しく猛っていた。

今なら、この肉穴に俺のペニスを挿入できる。彼女の身体で童貞を捨てられる。

激しい衝動に駆られるが、この時間を少しでも長く愉しみたい俺は、どうにか堪えた。ただ肉欲に任せてツバキを押し倒し射精してハイお終いでは、あまりにも無責任だ。

「胸、触ってもいいかな……?」

俺が尋ねると、彼女はコクリと頷いた。

コートを羽織っているので分かりにくかったが、彼女の乳房はクラスメイトの誰よりも大きい。

彼女の呼吸に合わせて膨らむその胸に、俺はゆっくり手を添えていく。

「……ふっ……んう……」

手のひらに収まりきらない大きさの、ふんわりした感触。

想像以上の柔らかさに、彼女の股を触っていた時とは別の心地よさを感じた。

俺は夢見心地で、むにゅ……むにゅ……と両手で乳房を揉みまわしていく。

そうしていると、ツバキは静かに制服のブラウスのボタンを外し始めた。

コートは羽織ったままで、ブラウスの前を開いていく。

彼女にしては可愛らしい花柄つきの白いブラジャーに守られた巨乳が、俺の前に晒し出された。

俺は性欲に任せて、ツブラジャーを指でつまみ、ずり下げた。

たゆんと彼女の生の乳房があふれ出て、色素の薄い乳首が露わになった。

俺は指先で、彼女の乳首に恐る恐る触れてみる。

「あっ……」

彼女の乳首は、興奮で固く膨れ上がっていた。

乳輪をなぞるように撫でてから、乳首をクニツとほぐすように揉んでみる。

「……………うっ……………はあっ……………」

ツバキは必死に声を抑えながら、切なげに喘ぐ。

俺はそんな彼女の反応をもっと見たくて、むにっ、むにゅっと乳房全体を揉み上げながら、親指で乳首の先端を弄り回す。

雨の湿気と彼女の汗で、彼女の肌はむっちりと俺の手に吸い付いてくる。

何だか我慢できなくなって、俺は何の前触れなく、いきなり彼女の乳首にちゅうっとキスをした。

「あうんっ……………！」

甲高い声でツバキが喘ぎ、乳房をぶるっと震わせた。

俺は跳ねる彼女の身体を逃がさないように抱き締めて、巨乳に顔をうずめていく。

乳首をちゅっと吸ってから、乳輪に舌を這わせ、さらに乳房全体を味わうように大胆に口づけをしていった。

彼女の柔らかな乳房を顔いっぱい感じられて、俺は天国に昇るような気分だった。

胸の谷間に頬ずりしながら、鼻でめいっぱい息を吸うと、彼女の湿った体臭が流れ込んでくる。

漫画で言うような甘い花の香りなどではなく、梅雨時で汗をかいた生々しい人間の匂い。だが、それがかえって興奮する。

一方、俺の股間は、もう勃起の限界を越えて、我慢汁を漏らし始めていた。とうとう耐えられなくなった俺は、ズボンとパンツを躊躇なく脱ぎ捨てた。

ツバキは、熱気を放っている俺の勃起ペニスを前にして、目を見開いた。

それから俺の顔をじっと見つめて全てを察した様子の彼女は、スカートの中から脱いだショーツを太ももから下ろしていった。

「ツバキ……」

俺が名前を呼ぶと、彼女は黙って身を寄せてきた。

座っている俺に跨って、俺の肉棒を自分のスカートの中に覆い隠した。

そして俺の肉幹に手を添えて、自分の陰部と擦り合わせ始める。

スカートで見えないが、俺の亀頭は、彼女の柔毛の中を探る肌触りをはっきりと感じている。

コンドームを着けていない。そんな事を言い出せるタイミングはとくに過ぎていた。

やがて肉棒の先に、ぬちゅっ……とした感触が当たった。

ついに膣口の位置を合わせたツバキは、俺の肩を抱きながら、ゆっくりと腰を落としていった。

続きは本編で！